

TAKAOKA DESIGN & CRAFT CENTER
NEWS LETTER

2020

9

September

vol.06

COVER STORY

誠心誠意、生きる
人間国宝・大澤光民と若者たち

展覧会情報 ◆ 傘寿記念 大澤光民の世界 一人間国宝としての歩み—
TOPIC ◆ 高岡地域地場産業センター移転オープン



誠心誠意、生きる

人間国宝・大澤光民と若者たち

重要無形文化財保持者（いわゆる「人間国宝」）「鑄金」の大澤光民さんは、この秋、傘寿を迎える。高岡で鑄物に携わり六十年以上。九月十一日から十四年ぶりとなる大規模な回顧展「大澤光民の世界―人間国宝としての歩み―」が高岡市美術館にて開催される。大澤さんが独自に考案した金属鑄造技法「鑄ぐるみ」。鑄型にあらかじめステンレス線や銅線など金属線を釘で固定し、溶けた金属を注ぎ込む。伝統的技法である「焼型鑄造法」で鑄型を焼き上げる時に、打ち付けた金属線が動いたり膨張したり金属の種類によって地金に溶け込んだりするため、象嵌とは違った偶然の文様を創り出す。若い人たちとともに新作制作に取り組み大澤さんを訪ねた。

おおざわ こうみん
大澤 光民 本名 幸勝 (ゆきまさ)

昭和16年 高岡市下伏間江に生まれる。
昭和33年 富山県立職業補導所銅器科卒業、越井銅器製作所にて就業
昭和43年 高岡市特産産業技術者養成スクール第1期生、6年間学ぶ
昭和44年 独立して大澤美術鑄造所を創立
昭和52年 通商産業大臣「伝統工芸士（銅器焼型鑄造部門）」認定
昭和55年 鑄ぐるみ鑄造技法を考案
昭和58年 日本工芸会正会員
平成7年 高岡市伝統工芸産業技術保持者指定
平成16年 卓越技能賞「現代の名工」表彰
平成17年 重要無形文化財「鑄金」保持者認定
平成20年 高岡地域文化財等修理協会会長に就任、御車山修復の監修
平成25年 平成の御車山制作監修（平成30年完成）
日本伝統工芸展をはじめ日展、県展など入賞受賞多数、表彰多数

原型から金属に
生まれ変わった作品



新作の原型。多様な面の形が、花器の表情を作る。



焼型鑄造法の鑄型。「寄せ」という部分的な鑄型を組み
合わせることで複雑な形状を再現できるため、古くか
ら仏像や人物の銅像などの製造に用いられる。



回顧展会期中の令和2年9月26日に、大澤さんは数え年80歳の傘寿を迎える。
鑄造後の鑄型から金属を取り出す「型ばらし」の作業では、今なお現役の様子を伺えた。

新しい自分、新しい作品と 対話する。

「自然、幸福、生き様、人工衛星、
宇宙、南極…」科学者か哲学者の
ような不思議な言葉が飛び出して
くる。ここは、人間国宝・大澤光民さ
んの工房。伝統的な金属工芸技法で
ある「焼型」※1の第一人者だ。

ここ2年ほど、大澤さんは体調を
崩し、作品制作の意欲も湧いてこな
かったという。しかしどうだろう、
工房の中で佇む大澤さんは、輝くよ
うな目で新作の鑄型を見ている。

「私が変わったことを、観る人が
どれだけ感じてもらえるだろうか。
作品作りが楽しい。観る人もそれを
感じて、無心で楽しんでもらいたい。
大澤は今までもないものを作ったな、
なんて見てもらいたい。」

新作の原型は、これまで制作して
きた花器では見られない特徴的な形
をしている。四方八方(東・西・南・
北・北東・北西・南東・南西、あら
ゆる方向、地球)、五行説(万物は火、

水・木・金・土の5種類の元素から
なるという説)から着想を得て、面
取りした花器である。

鑄型の制作工程をのぞかせても
らった。原型を外した鑄型に埴汁※2
を塗って修正していく。「早く埋
まってくれよー」と唱えながら筆を
動かす。その優しい言葉に工房が柔
らかな空気に包まれた。

大澤さんはモノと対話をしながら
制作を進めているという。

「焼型は全て自然にあるものを
使っている。自然は大きく、偉大な
もの。作業をしていると、人間に
とって健康とは、幸せとは、人間は
どこから来て、どこへ行くのか。な
どいろいろと考える。」

これまでの鑄ぐるみの作品の多く
には、直線の金属が使われてきた。
今回の新作では、柔らかな曲線の鑄
ぐるみを考えているそうだ。

「例えば、ひら仮名を入れた『い
ろはにほへと花器』のような。ほか
にも音符をつければ、歌を歌いたく
なる花器になるかもしれない。」

※1 【焼型(焼型鑄造法)】 粘土と和紙の繊維を調合した「真土(まね)」を用い鑄型を作り、約900℃で焼いた後、約400℃に冷ましてから熔解した金属を流し込む伝統的技法。

※2 【埴汁(はじり)】 粘土を水で溶いたもので、主に鑄型土などの結着材として使用される。

大澤さんの想像は膨らむ。

「今回の回顧展が実現したのも、不思議な縁で。自分は「縁」という言葉が大好きで、今まで知らなかった人、事を知ること、自分へ広がりが生まれる。」

回顧展では、大澤さんが監修を務め2018年に5年の歳月をかけて完成した「平成の御車山」※3の制作についても触れられる。

「平成の御車山、職人たちの仕事の監修を担当した。本来私が監修される立場であるが…。職人は一匹狼まとめることは難しく、木工、漆などは铸件とは違う分野。教えてもらう立場であった。いい勉強になった。」

まごころを持って、
ただひたすらに。

一つ新しいことを学ぶと、ドキドキするという。大澤さんのこの思考はどこから来ているのだろうか。

「人間国宝の香取正彦先生(写真下注釈)の梵鐘の研修会(昭和57〜60年に開催)に参加した。その時、香取先生

は『人間の心を一つにしなければ、いいものは作れないのだよ』とおっしゃった。命がけでする仕事だから、その時を精一杯、まごころを持って生きる。生かされているということ、世のため、人のために生きる、そのような気持ちでいる。」

大澤さんが铸件に語りかけ触るその動きにも、生き方があらわれている。

「悪い気持ちを持たないこと。人間はまっすぐに生きるだけ。まっすぐに純粹に。私は美を求めている。美の捉え方は人それぞれ。私はただひたすらに、無心に生きる。」

高岡は銅器のまち。高岡銅器400余年の長い歴史の中で、大澤さんも生きてきた。

「弥生時代には銅鐸が出現している。何千年の昔に铸件で銅鐸が出来たことに感動を覚える。縁あって私は铸件の人生を歩み、その限界に挑戦してきた。高岡でも新しい人、知恵のある人が出てくるだろう。その人たちが感動を生み出すだろう。感動するものが生き残っていくし、生きていくこととは感動することだと思ふ。」

2020年はコロナウイルスが猛威を振るっている。不確実性が深まり、人と人のつながりをあらためて考える状況になった今、大澤さんはこの世の中をどのようにとらえているのだろうか。

「コロナの中では、人は一人では生きていけないということがわかってきた。そもそも人がいなくなってしまうって何もすることが無くなる。ゆったりとした気持ちをもって生きていく。このような状況でも人間には生きていく免疫がある。これからの時代は、今までと違った考えを持たなければ、生きにくい世の中になった。私が若かったら、どのよう

に生きてだろうか。一人一人が漠然と生きる時代は終わり、真剣に考える時代が来た。今の世の中は、勉強しようと思えば、いつでもできる。考えようによつては、何でも出来る時代が来たのだ。」

铸件が若い人たちと結びつける

今回の新作制作には、若い人たちが大澤さんの手伝いをしている。その一人、新田翔さんはこれまで数年、大澤さんの下で技術を学び、制作の手伝いをしている。新作の原型は大澤さんがデザインし新田さんが3Dプリンターで制作したものだ。



夏場なら室温50度に達するという铸件場。この日も煙と作業の熱気に包まれていた。

香取正彦(かとりまさひこ) 1899~1988・工芸家・平和を祈願する梵鐘づくりで知られる鑄金家。重要無形文化財保持者(人間国宝)。鑄金家香取秀真の長男として東京小石川区に生まれる。東京美術学校鑄造科を卒業。戦時下に多くの鐘が金属供出のため破壊されたことに衝撃を受け、1950年より父秀真と共に平和を祈願する梵鐘づくりを始め、「広島平和の鐘」など150鐘を越す鐘を制作した。

※3 【平成の御車山制作事業】 平成を生きる職人たちが「ものづくりのまち高岡」の技術力を形にするために最高の「技」を集結させ御車山を制作した事業。制作にあたっては市民による寄付など、市民の「心」が集まった。現在は高岡御車山会館(高岡市守山町47-1)に展示されている。

「回顧展があるから、手伝って欲しいと先生から連絡があった。先生と一緒に制作をしていて思うのは、手を抜かず、誠心誠意作っている。それが作品の完成度を高めている。今回の回顧展では、初期の作品から展示されるから、先生の歩んできた道が見えてくると思う。」



新田 翔 (にした しょう)
金沢美術工芸大学工学部卒業。
株式会社小泉製作所製造部主任。
平成23年度高岡市伝統的工芸品
技術・技法継承者育成事業において
大澤さんから技術継承を受けた。

新田さんは、市内の鋳物工場に勤めている。今後、どのように金属工芸に向き合っていくのだろうか。

「何かを作っていきたいと考えている。私が興味のあるのは、新しい技術は積極的に取り入れて、鋳物とどんな新しいことができるのかということ。3Dプリンターを使ったり。」

新田さんの他にも、金属や鋳物を背景に持つ若者たちが大澤さんを手伝っている。小畑公未子さんもその一人だ。



手伝いのメンバーは平日はそれぞれの仕事を終えた後、大澤さんの工房に駆けつける。創作の時間を共有する貴重な経験だ。

「私たちのほかにも、数名が先生を手伝っている。新田さんを含め私たちは、金屋町にある『金属工芸工房かんか』に所属していて活動している。今回の回顧展の話も、先生の作品の仕上げを担当する浦島俊秀さんからお話があった。『かんか』には鋳物経験者も多く、先生のお手伝いができると思った。先生の作品の美しさはもちろん、制作工程での鋳型の美しさに驚く。先生にとつて砂などの素材、道具が全て愛おしいのだと思う。回顧展では、その時代の中で、先生が見つけたことが表現されている。作品を通してその過程を見ていると、いろいろな発見がある。私も何か発見できるといいなと思っている。焼型は、廃棄物がほとんど出ず、循環できる素晴らしい鋳物技法。作っては崩していくことをやっていきたい。」



小畑 公未子 (こばた きみこ)
金沢美術工芸大学美術工芸学部
鋳金専攻卒業。富山県子どもみらい
館主任専門員。第7回佐野ルネサ
ンス鋳金展入選、藝文京展入選等。



取材期間は7月から8月。鑄型づくりから鑄込みまでの作業を追った。



大澤さんの手から小畑さんの手に「寄せ」が託される。そこに大澤さんの思いと精神が宿っているように感じた。



作業を手伝ってきた若い人たちも一同に集い、型ばらし後の鑄型の中を全員で確認する。この笑顔の先にあるものを、回顧展では楽しみにしたい。



小嵐 未仁（こあらし みに）
金沢美術工芸大学工芸科鑄金専攻卒業。容器メーカーに勤務。休日を利用し、主に蠟原型による鑄物を制作。

小嵐未仁さんも大学で鑄物を専攻していた。
「鑄物の工程は、鑄型という最後には作品として残らないものに時間をかけていく。今回お手伝いをしていて、他の工芸とは違った鑄物の魅力をあらためて感じている。先生は目をキラキラさせて、これからの話、未来の話をする。回顧展ではそんな先生の人柄に触れてほしい。鑄物のまちな高岡であれば、別に仕事をしながらでも、鑄物に携わることができ

る。人間国宝の下でお手伝いができることは、貴重だと思う。」

若い人たちも先生の技術・技法はもちろん、人柄に魅力を感じているようだ。大澤さんは若い人たちに向かって言う。

「新しい人は、新しい知識を持っている。私の知識を吸収して欲しい、そして新しい人が、他の人にも伝えていって欲しい。」

大澤さんの優しい語り口と、時々ぞかせるユーモアに、工房では笑いが絶えない。だから自然と鑄物を志す人が集まってくるのだろう。半世紀以上にわたり獲得してきた大澤さんの技、その承継は、これから始まったばかりなのかもしれない。

人間・大澤光民

大澤光民さんは高岡を代表する金工作家、富山県唯一の人間国宝。傘寿という慶事を迎え、記念となる年に何かできればと考えていた。大澤さんは謙虚な方で、作品を並べるだけの展覧会を最初は辞退されたが、総合的に高岡の伝統工芸全体を牽引されてきた方なので、例えば「平成の御車山」のことも含めて企画できれば、と提案させていただいた。仕事を通じて社会に対して何が自分ができるだろうかということを常に考えている大澤さん。「人間・大澤光民」を観ていただける展覧会にしたいと考えている。

村上 隆
むらかみ りゅう

1953年(昭和28年)京都市。京都大学工学部卒業、同大学院工学研究科修了。東京藝術大学大学院美術研究科修了。学術博士。奈良文化財研究所 上席研究員、京都国立博物館学芸部長、京都美術工芸大学副学長を歴任。2012年4月から高岡市美術館館長(～現在)。2020年4月から光産業創成大学院大学客員教授。専門は、歴史材料科学、文化財学、博物館学。著書に、「金・銀・銅の日本史」、「金工技術」等。

今の人が学ぶべき
生き方・考え方

人間国宝のような地位にある方は立場上、感動した姿をストレートに見せないものであるうが、大澤さんは素直に面白い話には興味を持ち、探求熱心で、心が動いたことを素直に表現できる人。私は研究者として本モノの銅鐸に触れる中で、長い間に培われたものづくりの技の凄さとともに、弥生時代の人が初めて金属に出会った衝撃、その感性の原点に思いを馳せる。そんな話をする大澤さんは「そうなのか」と深い確信をもって頷く。私の研究では、ゼ口の中から本質を科学的手法で導き出す。ゼ口からモノを創り出すという点では大澤さんとお互いの波長が合うところがあり、お互いわかり合える部分があるのだと思う。

ネット社会に生きる現代の我々は画像を見ただけで理解したつもりでいる。また、何でも教えてもらうことに慣れてしまっているが、実際には何も理解していない。「焼型」、そして「鋳ぐるみ」は大変忍耐のい

る仕事である。大澤さんも最初もっと思い通りできると思っていたのではない。文様として金属を入れるのであれば象嵌でも作れる。金属は熱による膨張率が違うため、最初は相当戸惑ったのではない。しかしある時、そこに味があることに気づいてから居直った。失敗も「是」とするものづくり。数々の失敗をしながらその技術に到達した大澤さんからは学ぶことは多いのではない。

大澤さんの印象的な作品は、例えば《鋳ぐるみ銅皿「宙」》(写真左)。彫刻家である私の父・村上炳人の作品にも「宙」という作品があり、宇宙という言葉は私の中にもある。

この作品からは音が聞こえる。宇宙創生のビッグバンの爆音。大澤さんは自然界の見えないもの、聞こえないものを作品にすることができる人である。



《鋳ぐるみ銅皿「宙」》
平成16(2004)年 径40cm 高5cm
第59回富山県展
『人間国宝大澤光民の全貌展-鋳金の技と美』図録56ページ掲載

工芸のこれから

ものづくりは、もともと人の手によるもの。明治期以降、富国強兵、殖産興業を旗印に工業化が進み、規格品の大量生産化のための競争が生まれ、捨てられてきたものが沢山ある。現代の工業化に閉じ込められてしまったのが工芸。工芸の未来を占うのは難しいが、インバウンドやオンラインピックと浮かれていた社会がコロナ禍によって大きく変わった。工芸は見直されるチャンスであり、工芸技術が生かされる社会にしていくことが大事であるだろう。大澤さんの作品を観ることでその可能性を探りたい。

大澤さんには、これからは自由に楽しんでください、と申し上げたい。2年前に大澤さんは体調を崩したが、回顧展を機に甦ってくれるものと願っていた。作りたくても作れない苛立ち、葛藤があったと思う。先日大澤さんは、にこやかに「生まれ変わった私を見て欲しい」と。今回の回顧展からまた新しい歴史が刻まれることを楽しみにしている。

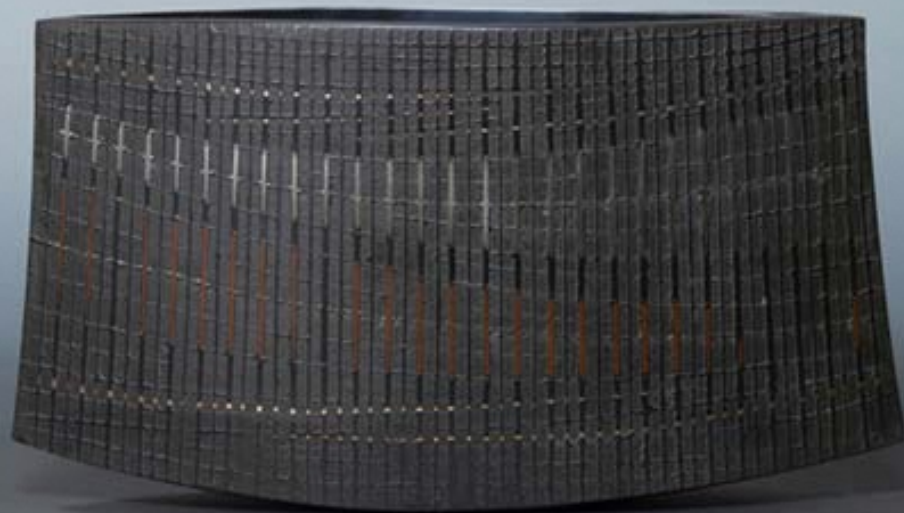
チューリップテレビ
開局30周年記念

傘寿
記念

大澤光民の世界

—人間国宝としての歩み—

人間国宝認定後、10年余りの軌跡を含めた初めての回顧展



鑄ぐるみ花器「宙擁」2015年

令和2年 **9月11日(金) - 10月18日(日)**

会場 **高岡市美術館** (高岡市中川1-1-30)

〔開館時間〕 **9:30 - 17:00** (入館は16:30まで)

〔休館日〕 **月曜日** ※ただし9月21日(月・祝)、22日(火・祝)は開館、23日(水)は休館

〔観覧料〕 **一般1000円** (前売・団体・シニア800円) /
高校・大学生500円 (団体400円) / 中学生以下無料

関連行事

事前申込制
聴講無料

① 記念講演会「大澤光民氏と村上隆館長による対談」

日時：9月26日(土) 午後2時～3時30分 会場：地階ビトークホール

② 担当学芸員が語る「大澤光民の世界」

日時：10月10日(土) 午後2時～3時 会場：地階ビトークホール
〔申込み〕9月11日より受付開始 いずれも電話先着順30名(美術館 ☎0766-20-1177)

詳細は高岡市美術館ホームページをご覧ください。 <https://www.e-tam.info/>

主催・大澤光民の世界展実行委員会〔高岡市美術館(公益財団法人高岡市民文化振興事業団)、チューリップテレビ〕

10/3

TOPICニュース

高岡地域地場産業センター 移転オープン

県西部地域の産業界と行政で組織する公益財団法人高岡地域地場産業センター(愛称:ZIBA「じーば」)が、令和2年10月3日「御旅屋セリオ」2階に移転オープンします。地域の伝統的工芸品を展示販売するほか、制作体験ができる施設も設置されます。

- 講演会 10月3日(土)
- 体験会 10月3日(土)、4日(日) 各種工芸体験の実施

● 連絡先 / 最新情報掲載先

- ▶ 高岡地域地場産業センター ☎0766-25-8283
HP <https://www.takaokajibasan.or.jp/archives/2970>
- ▶ 高岡市(産業企画課) ☎0766-20-1285
Twitter <https://twitter.com/takaokacity/>



取材編集・発行

高岡市デザイン・工芸センター
ニュースレター vol.6
令和2年9月発行

高岡市デザイン・工芸センター
〒939-1119 富山県高岡市オフィスパーク 5
TEL 0766-62-0520 FAX 0766-62-0521
WEB <https://www.suncenter.co.jp/takaoka/>
E-mail tdcc@suncenter.co.jp
● 休館日 月曜・祝日・年末年始
● 開館時間 9時～17時

